

## 求道者の如き姿

伊部恭之助

昭和五十五年五月三十日、わが国初の衆参両院同時選挙が始まった。新宿の街頭で遊説の第一声をあげられた大平さんの姿は、思いがけない形で始まった選挙に対する抑えがたい心情と、重大な局面にある内外の政治情勢のもとで揺れ動く政局への憂慮の念を身体全体でぶちまけているかのようにであった。高く腕を振り上げ、文字通り渾身の力を込めて時局を説き、政治の安定を訴えられるその圧倒されんばかりの気魄には、いつもの沈着、重厚な態度とはおよそ程遠いものがあつた。後で耳にしたところ、診断した医師の話では、常人であればその日の遊説途上ですでに倒れられていたはずとのことであつた。

亡き大平さんを偲ぶ時、私は一代の名宰相としての大平さんもさることながら、常住坐臥、真剣に政治信念の実践を心がけておられた求道者の如き姿が目に見えかぶる。ご自分の理念と人間臭い政治の現実との相剋に心を痛められながら、国民のために自己の所信の実現に向けて身を捧げ尽された人間大平さんの稀有のお人柄に、私は強い感銘を受けるのである。大平さんの生前の超人的な活躍とその壮烈ともいえる死を回顧して、私は中国の三國鼎立時代、蜀の劉備の「三顧の礼」によって出陣した諸葛孔明が、「出師の表」に「鞠躬して尽力し、死して後已む」と出陣の覚悟を記した故事を思い浮かべる。結局、大平さんは求道者として、その全身全霊を日本の政治に捧げて政治上の信念を貫き通し、まだこれから日本のために大いに役に立っていただかなければならない大切な身でありながら、「鞠躬して尽力し、死して後已む」を現実のものとなされてしまった。

大平さんの思い出は数々あるが、大蔵大臣ご在任中に安宅産業の経営破綻が露呈した。これが一商社の挫折にとどまらず、昭和初期の金融恐慌以上の経済的大混乱が国の内外に起ることを恐れた私は、その收拾に全力を傾けていた。その時、大平さんからいただいた力強い激励と協力には、いくら感謝してもしきれない。大平さんは当時、予算委員会その他のきわめて多忙な国務に携っておられたが、夜どんなに遅くなくても、寸暇をさいて状況をお聞きになり、いつも力強い励ましの言葉をかけてくださった。安宅問題は私にとって終生忘れがたい経験であったが、それを思い出すたびに、大平さんのお人柄に対する敬慕の念が年とともに深まっていくのである。

大平さんは、かつて私と私の家内に向って、現実の政治の世界において自己の信念を貫くことがいかに難しく、時には様々の回り道をしなければならぬことを、言外に苦衷を漂わせながら話された。家内に「あなたのご主人はよい道を選ばれた。本当に羨ましいと思います」と述懐されたことが、今では家内と私にとってのなつかしい思い出である。その時また、「私はご承知の通り住友と縁の深い四国の生まれであり、また若い頃尊敬していたキリスト者である矢内原、黒崎、江原等の諸先生が住友におられたこと、さらに、住友の理事をされていた川田順さんの書物に親しんでいたことなどから、住友に魅力を感じ、住友で働きたいと思ったこともあるのですよ」といわれたことを覚えていいる。

大平さんは私とほぼ同年代である。もし、大平さんが住友に入社されていたら、その信義に厚く篤実なお人柄と、その識見、力量は住友にとってどれほど大きな力となったであろうか、と試してみたりもする。しかしながら、大平さんが、今日の日本の素晴らしい発展に政治家として貢献された足跡を顧みると、偉大なる神の手になる選択は、結局、国民のためにも、また住友のためにも、より大きな至福をもたらしてくれたものと神に感謝しなければなるまい。

(住友銀行会長)